



コンチェルト Concerto



第9回仙台国際音楽コンクール

ヴァイオリン部門：2025年5月24日(土)～6月8日(日)
ピアノ部門：2025年6月14日(土)～6月29日(日)

Vol.9-1

(2024.5.24 第9回コンクール関連 第1号)

インタビュー 野平一郎 審査委員長 (第9回仙台国際音楽コンクール ピアノ部門)

第9回仙台国際音楽コンクールのピアノ部門審査委員長、野平一郎先生にお話を伺いました。野平先生は、ピアニスト・作曲家として、また、現在は東京音楽大学の学長、東京藝術大学名誉教授など、多方面でご活躍をされています。



第7回は審査委員、第8回からは審査委員長を務められていますが、コンクールの印象をお聴かせください。

仙台国際音楽コンクール(以下SIMC)の審査委員は前審査委員長の野島稔先生からお話を頂いて務めることになりました。また、第7回コンクール中に東京音楽大学でのお話をいただいて、今では学長を務めさせていただいているいます。

自分にとって野島先生との縁はとても大切なものです、そのひとつの軸になるのはこのSIMCでした。先生からは「審査」ということを、ずいぶん勉強させていただいたと思っています。
1位になられた方は、当然ですが、印象に残っています。第7回のエリック・ヒヨンロクさんはラウンド毎に非常に良くなられました。セミファイナルで初めて協奏曲を演奏する時に、全然躊躇はなかつたけれども、オーケストラとの共演があまり慣れていないような印象でした。しかし、最後のガラコンサートまでの4回の間に、オーケストラとどのように演奏したらいいか、つまり、オーケストラと一緒に、1つの曲を創っていきつつ、自分を魅せる方法を会得するという驚くべき進歩がありました。自分の中に非常に奥深い音楽性がないと短期間にあのように発展していくかないと 思います。

逆に、第8回のルーウィ・ジャーチンさんは、最初から最後まで高いクオリティを維持していました。彼のようなピアニストはなかなかないと思う。予選(リサイタル)のラウンドから、とにかく我々を魅了してやまなかった。ファイナルで弾いたプロコフィエフの2番、これほどのクオリティの高い音楽を持った人はなかなかいない。ぜひ、ここから頑張って欲しいと思っています。

SIMCは非常にクオリティが高いです。第8回で初めて審査委員長を務めさせていただいて予備審査を経験しました。438人も応募してくださいました方の中からどなたを仙台にお呼びするかというところが一番難しかった。少し言い過ぎかもしれません、予備審査を通過した方以外にも、「この方もお呼びしたい、この方もお呼びしたい」という方が数多くいらっしゃって、とても惜しい思いでした。恐らく、予備審査をしてくださった他の先生方も同様の印象だと思います。

ジャーチンさんもそうでしたが、コンクールの出場者にインタビューをすると指導者との繋がりを強く感じます。出場者と指導者との関係性についてはどうお考えですか。

その人をどのように育てていらっしゃったかという点で、先生の方の力は凄いなと毎回思います。例えば、ジャーチンさんもダン・タイ・ソン先生の指導力が大きいと感じます。もちろんそこには本人の能力もあり、努力もあると思います。あれほど指を鍛えつつ、頭と指が連結しているというか、言語化は難しいですが、体の

すべての循環が上手くいっている。それは先生が導いてくださることもあるでしょうから、指導の影響というのは、ピアニストにとってとても大きいと思います。それから、どこで勉強されたかということも影響していると思いますが、どんどんグローバル化が進んでいるから、「どの国で勉強したか、誰と勉強したか」ということを超えて活動して欲しいと思います。

SIMCは協奏曲中心であることが魅力のひとつだと思いますが、どのようにお考えですか。

協奏曲というのは、オーケストラがいればいいというものではなくて、そこに指揮者がいることが重要なファクターです。おそらく、コンクールのようにソリストが何人もいたら、全てのソリストが指揮者と100%意見が同じだとは限らないでしょう。でも、高橋さんと広上さん、この2人の指揮者は本当によくソリストたちと協調しあってくださっていると思います。その結果、セミファイナルで1回、ファイナルで2回、最後のガラコンサートの計4回の演奏機会を経た出場者は、どんどん変わっていく。それも非常に良い方向に。オーケストラとどのように弾けばいいのか分かってしまう。経験が少ない人でも、回を重ねる毎にどんどん成長していくさまが見える。これは、単に何回もオーケストラと演奏するということではなく、オーケストラ、特に指揮者との繋がりや音楽的なアドバイスを通じて、協奏曲への理解が深まっていくということ。そのようなサポートが非常に充実しているところが、協奏曲中心であるこのコンクールの最大の魅力だと思います。

コンクールの協奏曲のカデンツアは自作でもよいようですね。

コンクールで自作のカデンツアを演奏するのは大歓迎です！
私自身、唯一モーツアルト自身のカデンツアが残っていない協奏曲の演奏を依頼されたとき、調性から始まり、無調を経て、また調性に戻ってくるというカデンツアを作曲して弾いたことがあります。

最後に第9回に向けて一言お願いします。

前回と同様のクオリティを持った人たちが集まってくれたら、とても嬉しいですね。今、コンクールというものは順位がなかなか付けられないというところまで来ているのではないかと想像しています。それだけ若いピアニストの実力が伸びて、非常に高いレベルにきてます。ですが、そこを突き抜けて、いつの時代でも我々を感動させてくれる、我々を音楽の中に連れて行ってくれる、そういう人が仙台でも毎回出て欲しいなと思っています。第7回のヒヨンロクさんも、第8回のジャーチンさんもやっぱりそういう人でした。

非常に抽象的な言い方ですが、演奏者が音楽的に求めているものを我々が聴き取ることが審査じゃないか。つまり、「人間」いうことがとても大切ですね。単にそこで表面上、上手く弾いているというのではなくて、その人が何を考えているのか、音楽の中でどういうメッセージを我々にくれるのか、そういうことが非常に大事だと野島先生も考えていらっしゃったのではないかと思います。



第9回仙台国際音楽コンクール 実施要項発表

仙台国際音楽コンクールは、仙台市が2001年に創設し、3年毎に行われるコンクールです。才能ある若い音楽家を輩出することにより、世界の音楽文化の振興と国際的な文化交流に寄与することを目的としています。ヴァイオリンとピアノの2部門からなり、協奏曲を課題曲の中に据えるという特徴を持っています。

前回は新型コロナウイルス感染症とウクライナ情勢の影響下での開催となり、制約の多い状況であったにも拘わらず、無事にコンクールを開催することができました。今回も若い音楽家と聴衆とが一体となり、より開かれた雰囲気で音楽がもたらす喜びを共感できる、そんなコンクールになればと思います。

2024年7月10日(水)～2024年10月23日(水)の申込受付期間後にビデオによる予備審査が行われ、世界各国から選ばれた両部門各概ね36名が仙台に集まり予選に臨みます。



[コンクール開催期間]

■ヴァイオリン部門：2025年5月24日(土)～6月 8日(日)

■ピアノ部門 : 2025年6月14日(土)～6月29日(日)

[会場]

日立システムズホール仙台(青年文化センター)



ヴァイオリン部門

予選では、イザイの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第5番 ト長調 op.27-5を独奏で演奏。モーツアルトのヴァイオリンと管弦楽のためのアダージョ ホ長調 K261とロンド ハ長調 K373の2曲を指揮者なしのオーケストラと演奏します（オーケストラは仙台フィルハーモニー管弦楽団及び山形交響楽団）。予選からオーケストラと共に演ずるコンクールは世界でも珍しいと言われています。



セミファイナルでは、メンデルスゾーンまたはドヴォルザークの協奏曲を演奏、モーツアルトのカッサシオン ト長調 K63から第5楽章アダージョと、ブラームスの交響曲 第1番 ハ短調 op.68から第2楽章の指定箇所をオーケストラのコンサートマスターとして演奏します。協奏曲のソロとコンマスの演奏では、オーケストラとの接し方が異なり、多面的な視点での課題曲の選定になっています。

ファイナルは2曲の協奏曲を演奏します。モーツアルトのヴァイオリン協奏曲第1番～第5番の5曲から1曲と、古典から近現代の作曲家による著名な協奏曲18曲から1曲を選んで演奏します。予選、セミファイナル、ファイナルを通じ、これまで以上にモーツアルトの課題曲の比率が高まりました。平易に聴こえるモーツアルトですが、演奏者の基本的なテクニックだけではなく、徹底した精度や洗練された調和のとれた音、生命力や躍動感のある演奏を要求されます。2曲目の課題曲では、作曲家の違いによる多彩で華やかな躍動感のある演奏により、協奏曲の醍醐味を堪能できます。

(セミファイナル～ファイナルは指揮 広上淳一氏、仙台フィルハーモニー管弦楽団が共演)



ピアノ部門

予選では、バッハからラヴェルまでの11人の作曲家の作品1曲を含む任意の独奏曲で、30分以上35分を超えないリサイタルプログラムを構成し演奏します。独自性の高いプログラム形成で、演奏技術と芸術性を表現することが求められます。普段なかなか聴く機会のない曲に出会うことができるのも大きな魅力です。ピアノ部門とヴァイオリン部門の予選の課題曲構成が、極端に異なるのもこのコンクールの特色の一つです。

セミファイナルではモーツアルトのピアノ協奏曲第15番から第19番までの5曲から1曲を選択します。

ファイナルは2曲の協奏曲を演奏します。モーツアルトのピアノ協奏曲第20番、第21番、第22番、第24番、第25番、第27番の6曲から1曲を演奏。もう1曲はベートーヴェンから矢代秋雄までの著名なピアノ協奏曲18曲から選んで演奏します。セミファイナルからファイナルを通じ、3曲の課題曲のうち2曲はモーツアルトの曲になりました。ヴァイオリン部門と同様に、モーツアルトの演奏の完成度を上げることが上位入賞の鍵になるでしょう。

(セミファイナル～ファイナルは指揮 高関健氏、仙台フィルハーモニー管弦楽団が共演)



これまでコンクールの演奏をお聴きになったことのない皆さんもぜひ予選から聴かれるごとをお勧めします。コンクールで勝ち上がっていく出場者とご自身の評価を比較するのも一興です。この人を、と自身が思う出場者を応援するのも楽しみ方の一つです。普段の演奏会とは異なるコンクール独特の会場進行や緊張感から生まれた演奏に、新たな魅力を感じることでしょう。コンクール以外にもたくさんのイベントが目白押しです。コンクール開催中に次のラウンドに進めなかった出場者が市内各所で演奏する「チャレンジャーズ・ライブ」や「学校訪問ミニ・コンサート」などの関連事業が開催されるほか、全国から公募で選ばれた受講生に対して、「審査委員によるマスタークラス」(公開レッスン)が開催され、世界トップクラスの音楽家による音楽作りを間近に見る機会もあります。世界でもトップレベルと評価されたようになった仙台国際音楽コンクール、出場者のレベルも予選から非常に高く、「すごい」の一言です。クラシック・ファンのみならず、音楽ファンの皆様にぜひお勧めのイベントです。

「野島 稔メモリアル」公演レポート

コンクール第1回から第7回までピアノ部門審査委員長、2020年からは運営委員長を務められ、2022年5月に逝去された野島稔先生の功績を称える「野島稔メモリアル」公演が開催されました。3月30日(土)、31日(日)に日立システムズホール仙台 コンサートホールにて行われた、第9回ピアノ部門審査委員長の野平一郎先生によるレクチャーコンサートと、第8回優勝者の中野りなさん(ヴァイオリン)、ルウォ・ジャチンさん(ピアノ)のデュオリサイタルのレポートをそれぞれの公演に参加したボランティアが報告します。

3/30(土) もっと教えて野平一郎先生～鍵盤楽器の歴史と魅力～

このプログラムは、J.S.バッハが活躍した時代に奏でられていた、チェンバロ・ポジティフィオルガン(以下、オルガン)・ピアノの3つの楽器を野平先生が弾き分けながら、各楽器の魅力やバッハがそれらをどのように使い分けていたか等、丁寧にご説明をしてくださったプログラムでした。

紙面の関係から1曲目の演奏を中心に、筆者の感想も交えながら紹介したいと思います。

◆プログラム（いずれもJ.S.バッハ作曲）

ゴルトベルク変奏曲 BWV988より「アリア」

- ・3種の楽器にて弾き比べ

平均律クラヴィーア曲集第1巻

- 1番、2番、4番、5番、6番、7番、8番、9番、10番、13番、
21番、24番

- ・チェンバロによる演奏：2番、6番、10番、21番
・オルガンによる演奏：5番、7番、13番
・ピアノによる演奏：1番、4番、8番、9番、24番

(アンコール)

フランス組曲 第6番より「アルマンド」：オルガン

G線上のアリア：ピアノ

ブランデンブルク協奏曲 第5番

第1楽章より「カデンツァ」：チェンバロ

壇上には3種の楽器が並べられており、開演のベルが鳴ってもチェンバロの念入りな調律が行われていました。その様子を見て、チェンバロがとても繊細な楽器であることが分かりました。

調律師と入れ替えに、野平先生が登壇し、プログラムが始まりました。まず、時代背景です。バッハの時代、鍵盤楽器の主流はチェンバロやオルガンでしたが、ピアノもすでにあったとのこと。バッハもピアノを弾く機会はあったそうですが、鍵盤が重かったため、あまり良い印象を持っていなかったようとのご説明でした。



[1曲目] ゴルトベルク変奏曲

BWV988より「アリア」

野平先生はチェンバロ、オルガン、ピアノの順に3回演奏されました。

チェンバロは当時完成された楽器であり、バッハの鍵盤楽器のための作品のほとんどがチェンバロの曲のこと。この日使用されたチェンバロは2段の鍵盤があり下鍵盤は標準の音階、上鍵盤は下鍵盤の1オクターブ高い音階が出て、さらにカプラーという機能を使うと上下の鍵盤を同時に弾くことができます。

この日の演奏では上下の鍵盤を使い分けたり同時に弾いたりして音色の違いが大変よくわかりました。

オルガンによる演奏は、曲の前半と後半を音の高さ(フィート)を変えて演奏されました。オルガンは空気を送って音を出すため、ぼわーんとしたメルヘンチックな音が会場いっぱいに広がり、先に演奏したチェンバロのガラスのように凜とした音がまろやかになった感じの音色でした。フィートを変えると一段と明るい雰囲気となり、重なる音の広がりがとても奥深く、体が音に包まれているかのような感じになりました。

ピアノによる演奏は、ほかの二つの楽器には無い音の強弱が付くため、野平先生の曲の解釈が伝わってくるようでした。演奏をしながら日々天を仰ぎ見る先生のお姿は、まるでバッハの音楽が作り出す壮大な宇宙を楽しんでいらっしゃるように見えました。

[2曲目] 平均律クラヴィーア曲集第1巻

野平先生が各曲の調に合う楽器を選んで演奏されました。長調の曲は明るい音のオルガンで演奏されました。また、同じようなテンポと調の曲でもチェンバロでは少し軽やかに聞こえたところが面白く、ピアノはどうしてもおおらかな感じが醸し出されたように聞こえました。楽器によってこれほど趣が異なって聞こえるものかと感じました。アンコールも含めると2時間を少し過ぎましたが、野平先生の興味深いお話と素晴らしい演奏で大満足のプログラムでした。

3/31(日) 中野りな&ルウォ・ジャチン デュオリサイタル



第8回コンクールでは、ヴァイオリン部門の中野りなさんとピアノ部門のルウォ・ジャチンさんという二人の優勝者が誕生した。

二人のソロ演奏の素晴らしさは言うまでもないが、今回の野島稔先生を記念したコンサートではその二人のデュオが聴けるということで、随分前からとても楽しみにしていた。

◆プログラム

シマノフスキ：神話 op.30-3「ドリヤードとパン」

イザイ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第3番 二短調 op.27-3 (中野ソロ)

シューマン：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ短調 op.105

ショパン：バラード 第1番 ト短調 op.23 (ルウォソロ)

グラナドス：ゴイエスカス 第2番 第6曲

「エビローグ：幽霊のセレナード」(ルウォソロ)

ラヴェル：鏡 第5曲「鐘の谷」(ルウォソロ)

サン=サーンス：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 二短調 op.75

(アンコール)

クライスラー：ウィーン奇想曲

このコンサートにおいては選曲も目を引くものがあった。ポーランドの作曲家シマノフスキの「神話」から「ドリヤードとパン」、グラナドスの「ゴイエスカス」より「幽霊のセレナード」、シューマンのヴァイオリン・ソナタの3曲は、これまで生で聴く機会がなかったので、とりわけ新鮮な気持ちで聴くことができた。

2年前のコンクールでも際立っていた二人のテクニックの鮮やかさや音色の美しさはますます磨きがかけられ、最初から最後まで心を奪われっぱなしで聴き入った。やはり、音楽において音色の美しさは何物にも勝る魅力だと改めて感じる。豊かな音楽性を支える技巧のすばらしさもいつ聴いても惹き付けられ、片時も目と耳を離すことなくあつという間に幸せな時間が過ぎ去った。最後のサン=サーンスのヴァイオリン・ソナタは最後を飾るにふさわしい華やかな曲で、終わってほしくないなどと思いながら、この共演を味わうようにして聴いた。

このデュオが実現したことは、仙台のコンクールに出場した若手演奏家を応援している地元の私たちにとってとても貴重な機会となった。間近で二人の息遣いやアイコンタクトの様子を見ることができ、感激した。同時に、若い二人にとってかけがえのない経験となったことと思う。有能なソリストたちは、どうしてもソロの演奏に力を入れることが多くなると思うが、特に若い時期に他の演奏家と共に演することは大きな刺激となると共に互いの演奏に相乗効果を生み、それぞれのその後の演奏に収穫をもたらすことと思う。

そのような場を共有できたことにこの上ない喜びを感じる。今後の二人の活躍を願い、また仙台で演奏していただく機会を心待ちにしたい。



ボランティアが支える仙台国際音楽コンクール

コンクールボランティア紹介 ~ホームステイ受入れ部門編~



仙台国際音楽コンクールの運営は、出場者サポート部門、会場運営サポート部門、ホームステイ受入れ部門、広報宣伝サポート部門の4つの部門で活動するボランティアがサポートしています。事務局では2025年に開催される第9回コンクールに向けて一緒に活動してくださるボランティアを募集しています。今回はその中で、コンクール出場を終えた出場者のホームステイを受け入れる「ホームステイ受入れ部門」のボランティアリーダーのMさん、Hさんにさまざまな疑問・質問に答えていただきました。

Q1.ホームステイ受入れ部門のボランティアを申し込んだきっかけは？今までどのような方を受入れましたか？

[M]子どもが小学校1年の第3回のコンクールから行っていて、20年以上になります。市民センターのボランティア募集案内を見て、クラシック音楽のことは分らないけれど、いろんな国の人には会えるということに魅力を感じ、申し込みました。今まで、ロシアやギリシャの方、ドイツに留学中の日本の方などのホストファミリーをして、期間も2泊から2週間までと出場者の希望に合わせて受け入れました。

[H]私は第7回の時にホームステイボランティアをやっている友人に誘われて申し込みました。2週間、ヴァイオリン部門に出場したアメリカの出場者のホームステイを受け入れました。ホームステイを受入れるのは初めてでしたが、友人がホームステイを受け入れているのを見ていたので軽い気持ちで受け入れました。

Q2.ホームステイを受入れる前に心配していたことはありましたか？

[H]我が家は子どもが3人なので、子どもが嫌いだとどうしようと思っていた。初めて顔合わせをした時も子どもたちを連れて行きましたが、優しく対応してくれました。子どもが小さいと無理だと思っているご家庭もあると思いますが、全く問題ありませんでした。我が家は子どもが幼稚園と小学校の時だったけれど、一緒に遊んでもらって楽しかったし、保育園の送迎にも一緒に行ったり、子どもにとっても楽しい思い出が増えてとても良い経験となりました。未就学児がいるとクラシック音楽のコンサートに行くのが難しいけれど、子どもも入場できるチャレンジーズ・ライブの招待をいただけたので、一緒にコンサートを見ることができて良かったです。

Q3.ホームステイというと、どんな準備が必要ですか？

[H]ホームステイというと、一戸建てで、大きなお部屋があって…というイメージがあるかもしれません。うちはマンションですが、洋服ダンスを置いている部屋があって、そこを使ってもらいました。部屋が狭くともプライベートな空間が確保できれば大丈夫でした。あまり難しく考えず、自分の生活の日常に受け入れるという気持ちでいいと思います。ホームステイが始まると意外とあっという間でやってよかったです。

Q4.ホームステイを受入れての思い出などありますか？

[M]一緒に過ごした時間すべてが思い出です。家でヴァイオリンの練習を聴けることができる幸運な時間でした。子どものころからそういう機会に触れられることが大事だと思いますが、実際はなかなか難しいので、貴重な機会でした。

[H]2週間と聞くと長いと思うかもしれません、やってみるとあつという間でした。出場者は仙台を知らない方がほとんどなので、一緒に松島や仙台城址、大崎八幡宮などを観光しました。一緒に行って、改めて仙台のことや歴史を再認識したり、仙台の魅力を伝える機会となりました。説明することも楽しかったし、こちらも改めて勉強になりました。

Q5.ホームステイする出場者とはいつ会えますか？

[M]ホームステイはコンクールの出場を終えてからとなります。コンクールの予選前までに一度、出場者と顔合わせをします。コンクールの予選の演奏を聴いて、演奏が終わった後にお話しすることもできます。中には、コンクール中に食事や買い物に一緒に行く方もいらっしゃるようです。コンクール出場後のチャレンジーズ・ライブや学校訪問ミニ・コンサートに出演する場合は、その送迎をしたり…ということもあります。送迎は自家用車がなくても、事務局が調整したり、対応してくれる心配しなくて大丈夫です。

Q6.ホームステイする方とのコミュニケーションは大丈夫ですか？

[M]語学のハードルはないと思います。今はスマートフォンの翻訳アプリもあるので、言葉の問題はほとんどなかったです。専門的な話であれば難しいと思いますが、ホームステイは日常生活なので。みなさん音楽家として国際的に活躍しようとしている方々なので、コミュニケーション能力も高い方が多いように感じます。

Q7.食事で気をつけることはありますか？

[M]ベジタリアンの方を受入れた時がありました。そのため特別な食事を作ったわけではなく、こちらで作ったもので食べられるものを食べていたという感じでした。海外で同じ音楽学校に通っている出場者同士やコンクールで知り合った同士で外食することも結構あったので、食事のことは心配しなくていいと思います。

[H]食事のことを心配していましたが、特別な食事を準備しなくても何でも食べてくれました。外食に行っても、今はメニューが英語やほかの言語も併記されてるし、ご自身で翻訳アプリで調べたりして問題なかったです。家で流しそうめんをしたり、みんなで焼肉や回転寿司を食べに行ったりして、一緒に食事をして家族みんなで楽しく過ごしました。お箸も上手に使えてましたね。

Q8.ホームステイの魅力とはどんなことですか？

[M]日常では出会えない人と会うことできることだと思います。出場者の一番の応援者になれるのは、このホームステイ受入れ部門だと思います。人柄など一番身近で触れられるのが魅力だと思います。

[H]ホームステイ中はもちろんですが、SNSを通してずっとつながりが持てるのでしょうか。ホームステイはその時だけではなく、SNSでつながって、その後の音楽活動や活躍を見て応援することができる魅力。世界で活躍している人とつながっていることが嬉しい気持ちになります。お互いにとって良い思い出しか残らないと思います。

Q9.最後にホームステイ受入れ部門のおすすめポイントをどうぞ

[M]このコンクールは3年に一度しかないので、毎回このホームステイボランティアを楽しみにしています。以前にホームステイされた方を最後に空港で見送るときには大号泣してしまいました。それぐらい本当に素敵なお会いだったので、その後もずっと続けています。分からないことや、不安なことは登録後の説明会で確認できますし、色々な事情は事前に伝ええたうえでマッチングを行うのでその辺は心配しなくても大丈夫だと思います。1回やってみればきっとその魅力が分かるはず。ぜひ一緒に活動しましょう。

[H]3年に一度開催されるコンクールで若い音楽家の方と会って日本の家族としてコンクールを応援し、触れ合えるのはこのホームステイ部門だけだと思うので、迷っている方がいるならぜひ登録して一緒に体験してほしいです。一度やってみるとどんな感じかがわかるので、軽い気持ちで挑戦してみるのもいいと思います。我が家はこれからもホームステイボランティアを続けたいと思っています。

[取材を終えて]お二人からホームステイボランティアの思い出をたくさん伺い、来年開催されるコンクールも楽しみにしている様子が伝わってきました。仙台国際音楽コンクールならではの「ホームステイ受入れ部門」でボランティアをすることで、コンクールを数倍楽しむことができるかもしれませんよ。興味がある方、直接ボランティアの方に話を聞きたいという方は、6月21日(金)、22日(土)に行われるボランティア説明会にぜひ来てみてくださいね。

発行：第9回仙台国際音楽コンクール 広報宣伝サポートボランティア

[コンクール公式 X (旧Twitter)] @sendai_simc [ボランティアブログ X (旧Twitter)] @simc_volblog

問合せ：仙台市市民文化事業団音楽振興課(仙台国際音楽コンクール事務局) Tel: 022-727-1872 / e-mail: info@simc.jp / URL: https://simc.jp